

アムスルだより

No.18 1996年 3月10日

Akajima Marine Science Laboratory 阿嘉島臨海研究所



〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179

TEL:098-987-2304

FAX:098-987-2875

アムスルとは、阿嘉島臨海研究所のニックネームです



海のクリスタルグラス

-クシクラゲ-

先日1月19日、阿嘉島の海はこの時期には珍しく、ほとんど波のない穏やかな顔を見せてくれていました。毎朝の水温観測のため阿嘉港に行くと、そこには、まるでこの静かな日を待っていたかのように、透明な体を持つあの生き物が水面とたわむれていました。というわけで、今回はクラゲについてお話ししましょう。

この日は、十数種類のクラゲを一度に見つけることが出来ました。これらのクラゲは大きく2つのグループに分けることができます。一つはサンゴなどと同じ刺胞(しほう)動物の仲間、ヨウラククラゲ、ツツミクラゲ、ヒドロクラゲ類などが見られました。もう一つのグループは有櫛(ゆうしつ)動物の仲間、オビクラゲ、テマリクラゲ、フウセンクラゲ、チョウクラゲ、カブトクラゲ、アカダマクラゲが見つかりました。

刺胞動物はその名の通り、触手にたくさんの刺胞と呼ばれる小器官があり、

そこから毒針を発射して餌を捕えます。海で泳いでいる時にチクリと刺されたら、その犯人はこの刺胞を持ったクラゲです。一方の有櫛動物のクラゲは、一般にクシクラゲと呼ばれており、刺胞がないので刺すことはありません。クシクラゲは刺胞の代わり膠胞(こうほう)と呼ばれる粘着性のある細胞がたくさん並んだ長い触手を持っていて、伸ばした触手で餌を揃らえると、触手を縮めて獲物を口へと運びます。

クシクラゲの仲間は、主に小さなプランクトンを食べますが、今回阿嘉港で見られたチョウクラゲなどは、自分と同じくらいの大さの他のクシクラゲを丸飲みにしてしまうほど、大きな口をもったクラゲです。最近の研究によると、クシクラゲの仲間には、大口なものがあるばかりでなく、どうやらとても大喰いなものもいるらしいということがわかってきました。一般に生物はある程度の量を食べると、その食欲が減退するのが普通なのですが、この研究で行った実験では、いくら餌を与えても際限なく捕食したそうです。

クシクラゲ類の最大の特徴は、なんといってもその名にあるように櫛板(しつばん)と呼ばれる櫛(くし)状の構造を持っていることです。クシク

ラゲの体側には、この櫛板のたくさん並んだ列が 8 列あり、これを波打つように動かして、水中を滑るように泳ぎます。このとき、一枚一枚の櫛板が、まるでクリスタルガラスのようにキラキラと七色に輝き、その姿は、透きとおった体とあいまって、幻想的と言えるほどの美しさです。

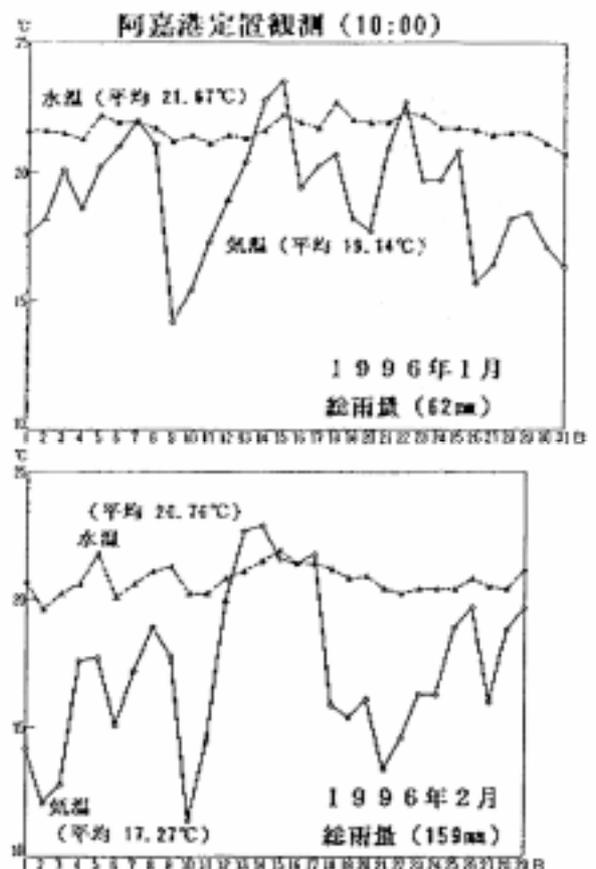
クシクラゲの仲間は皆このように櫛板を使って遊泳しますが、中にはそれに加えて、変わった遊法方法を持つものもいます。例えば、先ほど述べたチョウクラゲは、口の横に袖(そで)状突起を持ち、これを大きく羽ばたくように打ち合わせ、時折、大きな移動を行いますし、オビクラゲはその帯状の体をウネウネとくねらせて泳いだりします。

クシクラゲの仲間は、世界の温暖な海域に広く分布し、このようにさまざまな姿のものがいます。皆さんも、波静かな阿嘉港内でこの生き物を探してみてもいいでしょうか。きっとその美しさに驚かれることと思います。ただし、クリスタルガラスのようにとてもこわれやすい生き物なので、取扱いにはご注意ください...

阿嘉島の海より

-漂着物-

一年でいちばん水温が下がるこの時期、海に潜るのはややおっくうになりますが、そんなときは海岸で漂着物を観察してみると、おもしろい発見をすることがあります。特に、クシバルなど北側の海岸には、季節風に乗って中国や台湾、韓国からの漂着物が多く、



ペットボトルや使い捨てのライターなどを集めてみるのも一興です。ただし、これらの漂着物は、海の生態系にとっては好ましくないものです。例えば、ウミガメは好物のクラゲと間違えてビニールなどを食べ、死亡することがあると言われています。私たちが海のゴミの放出源にならないよう、十分に注意しましょう。

私事になりますが、林原はこの 3 月をもってアムスルを退職し、水産庁の研究所に移ることになりました。約 7 年間にわたる阿嘉島での生活は、私にとってかけがえのない経験であり、地元のみなさんのご厚情に深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。